

武志大和尚と出会い仏教の大切さを知る

國廣敏郎さん

善光寺の総代で護持会長を務める國廣敏郎さん（85）は、通信機器や半導体など情報・通信系の総合電機メーカーとして知られるNEC（日本電気）の黎明期を切り拓き、日本のデジタル技術を世界に売り込んだ先駆者の一人である。

東京大学工学部を卒業後、日本初の外国資本（アメリカ）との合弁会社として明治三十二年（一八九九）に設立されたNECに就職し、米国イリノイ州の州立大学へ三年間留学して最先端の技術を学んだ。帰国後はエンジニア（技術

者）として世界各国を飛び歩いてデジタル技術を世界に売り込み、戦後日本の経済成長を支えた日本を代表するエレクトロニクス企業、NECの副社長にまで上り詰めた。

一貫して工学畑を歩いてきた國廣さんは、父親の死によって善光寺と出会い、先代の黒田武志住職（大圓武志大和尚）と結ばれた。横浜市の洋光台に住む國廣さんは、父を弔うための寺を探し、近所の知り合いから善光寺を紹介された。善光寺を訪問して、「お寺くさくない、いい寺だな」と思い、すぐに気に入った。

黒田住職と会って話すうちに、その人間的な

魅力に引き付けられた。

「この人は人物だと思った。一介の住職ではなく、もっと大きな本山で活躍されるべきだ！と失礼なことを申し上げたこともある」と振り返る。

際立っていたのは、黒田住職がいつも仏教をやさしく説いたことだ。偉ぶらない振る舞い、法要のときも檀信徒に、ごく普通の日常と変わらぬ言葉で話しかけた。エンジニアだから理屈に合わないことには納得しない。

しかし黒田住職の話聞き、会話を重ねるうちに、仏教のもつ世界を知り、仏教の大切さが理解できるようになったと言う。

ある時、善光寺の縁で他の寺院の法要に参加し、その寺の住職の話や機会があったが、黒田住職から聞く話とは全く違っていた。だから「善光寺さんと出会ったことはラッキーだった」と喜んでい

る。

以来、母親も夫人もみな善光寺のお世話になり、供養している。「いつかは私もお世話になります」と笑っている。

出身は大分県の国東半島の先端にある小さな村。仏教の信仰が篤い土地柄で、村の人は何かあるたびにお寺へ集まった。米国でもキリスト教の教会を中心とした市民の生活があった。寺や教会を中心に人々が生活する地域社会のあり方を國廣さんは素晴らしいと思う。

「葬式はちゃんとやってほしいが、葬式仏教だけではダメ。寺を中心とした心の交わり、檀家や地域との交流が大切。お寺が地域の中心になれば、日本はもっとよくなる」と言う。

独り身になった現在の趣味は俳句や詩吟。妻を亡くして二〜三年ほどした頃、妻の友人たち

に誘われて俳句の会に顔を出すようになり、俳句の魅力に目覚めた。「句会に出て、互いのセンスを読み合い、批評し合う雰囲気が入った」。今では句会に出るのを楽しみにしている。

最先端の技術者として活躍してきた國廣さんの人生観は、善光寺との出会いで大きく変わったと言えるかもしれない。



▶「心はコンピュータでは変わらない。文学は理学よりも歴史的のちがはるかに長い」と話す國廣さん



